

高麗瓦の製作技法について

—韓国における考古民族学的研究・Ⅲ—

渡 辺 誠

1. はじめに

わが国の瓦は古代に百済より伝わり、これに新羅・高句麗などの朝鮮半島の三国の影響を強く受けていることは、よく知られていることである。

これに対して近世初頭にも大きな影響のあったことは、ほとんど知られていない。文禄・慶長の役（1592年・1597～98年）を直接的な契機として伝わった高麗瓦は、今日ではそのルーツがほとんど忘れられた状態で、各地の屋根の上のっている。熊本県下では朝鮮軒（写真1）、愛知・岐阜県下などで波瓦・花瓦（同2）などとよばれているものがそれである。

高麗瓦の最大の特徴は豊かな装飾性にある。特に韓国語でヨマクセ（女莫斯）とよばれる軒平瓦は倒三角形を呈し、それらが長く連なった軒先（同3）は美しい。そして午後の日差しを受けて壁に伸びた長い影（同4）はとても魅力的である。

この美しさの背景には、瓦当面が本体に直角なのではなく、地面に垂直になるように傾斜をつけて作られているという、技術的な問題がひそんでいる。すなわち直角に加えて、屋根先の勾配分だけ接合角度が大きくなっているのである。その角度は何度なのか、またそれを常に一定に保ちながら量産するためにどんな技法が使われているのか、華やかな垂木をも含めて軒先を仰ぎみる時に、はなはだ気になることであった。

古代瓦のように本体と瓦当面とが直角であれば、瓦当面を下にして経験的に本体を垂直に立てればよいのであるが、高麗瓦の場合はどうしているのか、技術的にはきわめて重要かつ興味深い

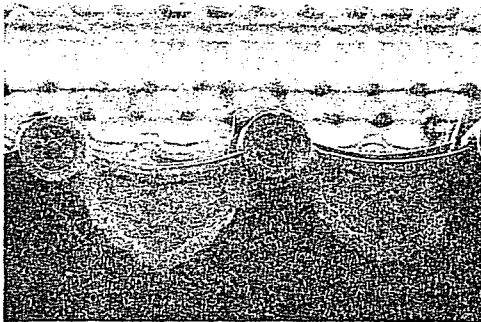


写真1 朝鮮軒（熊本県宇土市）

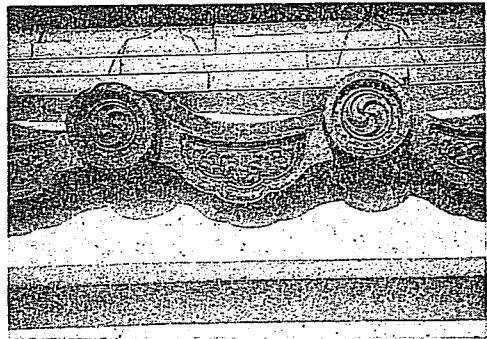


写真2 波瓦（岐阜県中津川市）

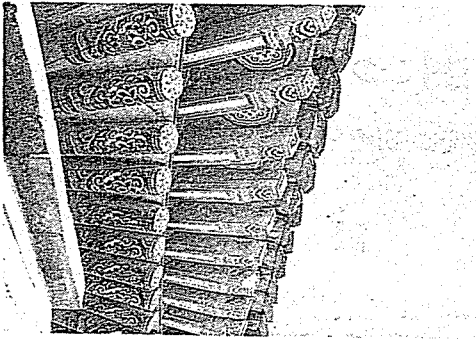


写真3 高麗瓦の軒先(韓国水原城)

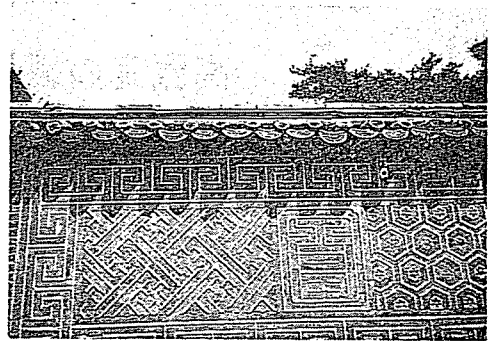


写真4 高麗瓦の影(ソウル秘苑)

問題である。

こうした問題を解決するために、1986年8月と1987年5月に、韓国での考古民族学的調査を行った。調査先は、歴史的建造物の復元瓦も製作している、ソウルの金星瓦株式会社であった。

2. 製作工程の記録

金星瓦の事務所はソウル特別市江南区三成洞にあるが、工場は京畿道広州郡東部邑望月里と、慶尚南道蔚州郡凡西面屈火里とにある。筆者が任五燧社長(同5)に案内して頂いたのは、ソウル近郊の望月里の工場(同6)であった。

ここで社長自身と職人から教えて頂いた高麗瓦の製作工程は、大略以下に記すとおりである。まず原料の粘土は、今では足でこねることはなく、真空製作機から自動的に筒状に送り出されてくる(同7)。この時自動的に4本の筋がつけられ、乾燥後軽く叩いて4枚の平瓦に分けやすくされている。

この筒状のものを天日で乾燥させる。ある程度乾いたら上下逆さにし、歪みも矯正する(同8)。天日乾燥の期間は平均2日間である。天気が良すぎてあまり急速に乾くのもよくない。

こうして作られた材料は不必要に乾燥しないように、ビニールを被せて作業場のなかに保管し



写真5 任五燧社長

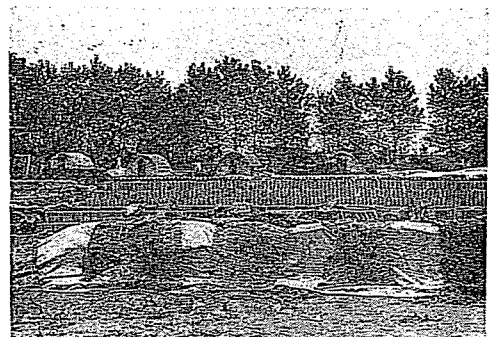


写真6 金星瓦望月里工場

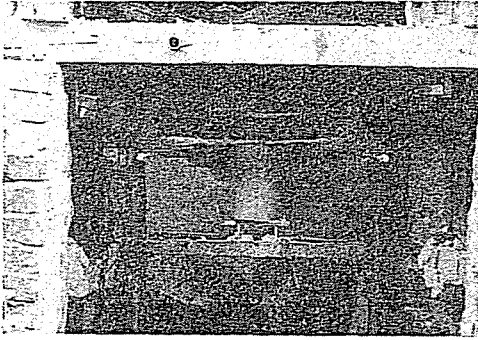


写真7 筒状の送り出し



写真8 天日乾燥



写真9 作業始め



写真10 作業台



写真11 ひっかき傷をつける



写真12 粘土を丸めてのせる

ておく。

そして作業台の近くに必要枚数だけ少しずつ運び、製作が始まる(同9)。

製作に当っては、まず作業台上に砂をまく。これは型離れをよくするためであり、砂は川砂をフルイにかけたものである。

この作業台は意外に簡素なものであった(同10)。その上面は水平であるが、瓦をたてかける前面は斜めに傾斜している。これを見てもっとも知りたいと思っていたことがはっきりと分かっ



写真13 ひらたくのばす



写真14 型をあててたたく



写真15 竹べらで切る



写真16 内側を糸で切る

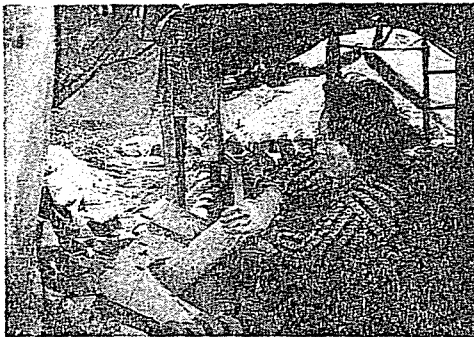


写真17 へらでなでる

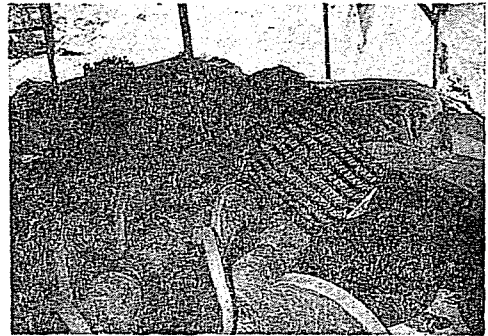


写真18 出来上がり

たのであるが、その角度は約120度であった。すなわちこれより90度を引いた残りの30度は、軒先の屋根の勾配を反映しているのである。

この斜めの面に瓦をたてかければ両端が高くなるので、これを台面にそって糸できる。その切り口を2本あるうちの細い方のヨコヅチ（韓国語ではパンマギ）でたたき、その上に太い針を束ねた道具でひっかけ傷をつける（同11）。

そして別な粘土を太く丸めてその上のにせ（同12）、太い方のヨコヅチで横に数往復するよう



写真19 日陰干し

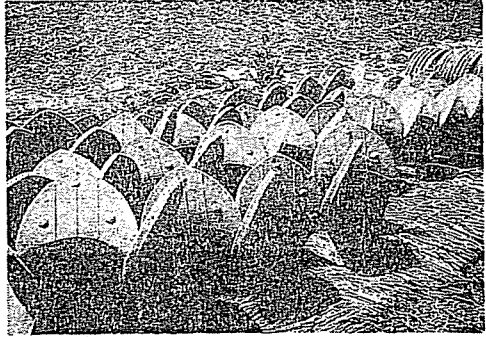


写真20 天日乾燥

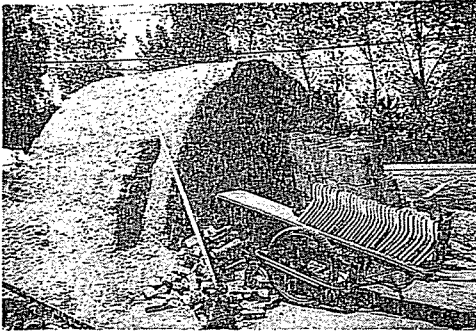


写真21 ダルマ窯へ窯詰め

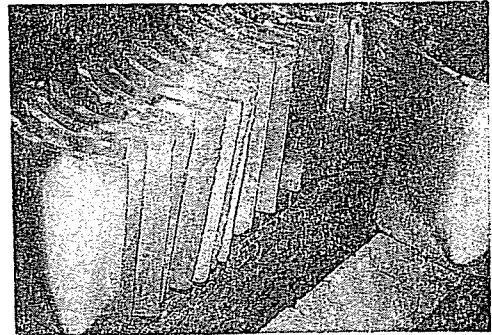


写真22 ダルマ窯の内部

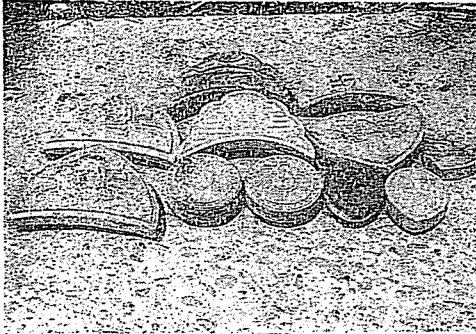


写真23 木型

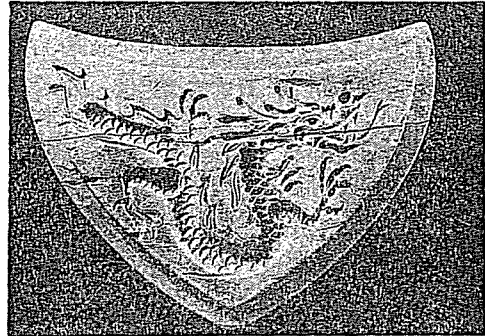


写真24 龍を彫った型

にたたいて平たくのぼす(同13)。

この上に砂をまき、文様の彫りこまれた型をあて、細い方のヨコヅチで4、5回たたく(同14)。そしてはみだした粘土を竹べらで切り(同15)、その切り口を水をつけた竹べらでなでる。

次に型をはずして接合面のはみだした粘土を糸できる(同16)。これを手に水をつけてなで、へらでもなでてほぼ出来上がりとなる(同17)。

下の方にとめ穴をあけてから手でもちあげ、細部の修正とナデ調整を行い、ひとまざまわりに

斜めにたてかけておく(同18)。このヨマクセ(女莫斯)の1日の生産量は200~300枚である。

出来上がった瓦は、作業場内で1日間日陰干しされる(同19)。そして外でも1日乾燥(同20)した後、窯詰めされる。

窯は日本ではダルマ窯とよばれているもので(同21)、韓国ではトゥッコビ(がまがえる)窯とよばれている。そのなかはロストル式になっている(同22)。日入れは1日で、2日間そのままにしておいた後に取り出す。

こうした伝統的な方法のほかに機械化も進んでおり、始めからプレスして生産されることも多い。そして興味深いことに、伝統的な文様だからということで、高麗瓦のメルクマールである綾杉状の叩き目が、型自体に彫りこまれているのである。

以上の製作工程を調査させて頂いた最大の収穫は、120度という角度を保つために、瓦当面上にして作るということが分かったことである。

そしてその型は厚さ3cmの板製であるが(同23)、標本に3点頂くことができたのは大変ありがたいことであった。その型は菓子やカマボコなどの型を連想させるものである(同24)。実際その型の発注先である乙支工芸社では、室内装飾全般の彫刻のほかに、菓子の木型も彫っているということであった。

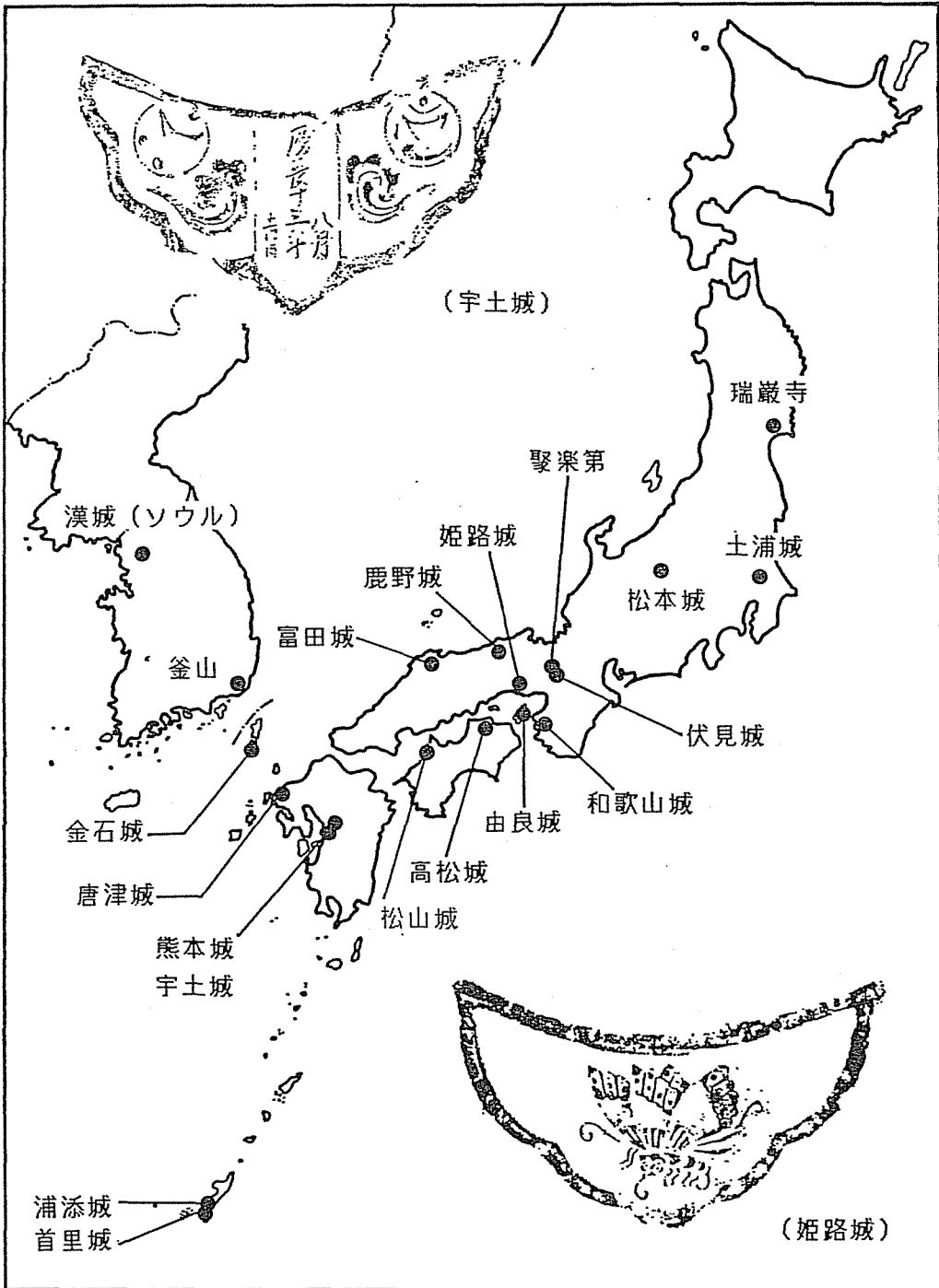
3. 歴史的背景の素描

120度という角度を保つために瓦当面が上にくる点は、日本ではまったくみられないきわめて興味深い方法である。もっとも日本の造瓦技術そのものが、古代に朝鮮半島より伝わったものであることはいうまでもない。そして高麗時代になると元の影響で旧スタイルから高麗瓦へと大きく変化するのに対し、日本では近世初頭に高麗瓦が伝わっても旧スタイルに固執していて、両者は並存してきている。

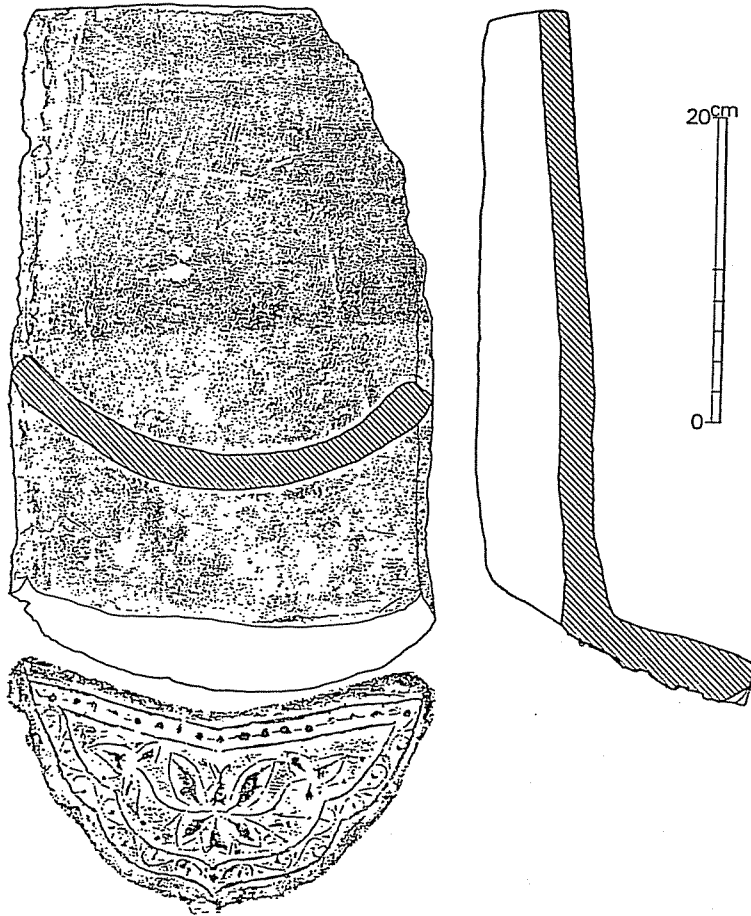
関野貞先生の著書『支那の建築と芸術』(1938年)や『朝鮮の建築と芸術』(1941年)によると、これは中国の宋代に始まり、元代に高麗王朝に伝わったものであるという。そして日本への伝播は、同『日本の建築と芸術』上巻(1940年)に、次のように記されている。

余の知る範囲内では、此の支那式唐草瓦を用ひたのは天正12年経営の聚楽第が最初である。此の頃はまだ朝鮮との関係があまり起らなかったから、其の動機は或は唐人一観又は彼の徒弟から出たものではなからうか。次いで文禄3年の伏見城、慶長4年の豊国神社、慶長13年池田輝政修築の姫路城にも用ひられ、其の形式が次第に各方面に伝播した。文禄の役諸大名が征韓の役に従事し朝鮮の建築物を見たから中には朝鮮風の瓦当をつくったものもあつたやうである。

これによると文禄の役以前に伝播したものと、以後に伝播したものがあるという。しかしそれら二者間の導入の動機が同じであったとは考えられない。むしろ文禄の役以後の導入の方に、強



第1図 日本国内における高麗瓦の分布



第2図 金石城の高麗瓦(報告書より)

く関心をもたざるをえないのである。

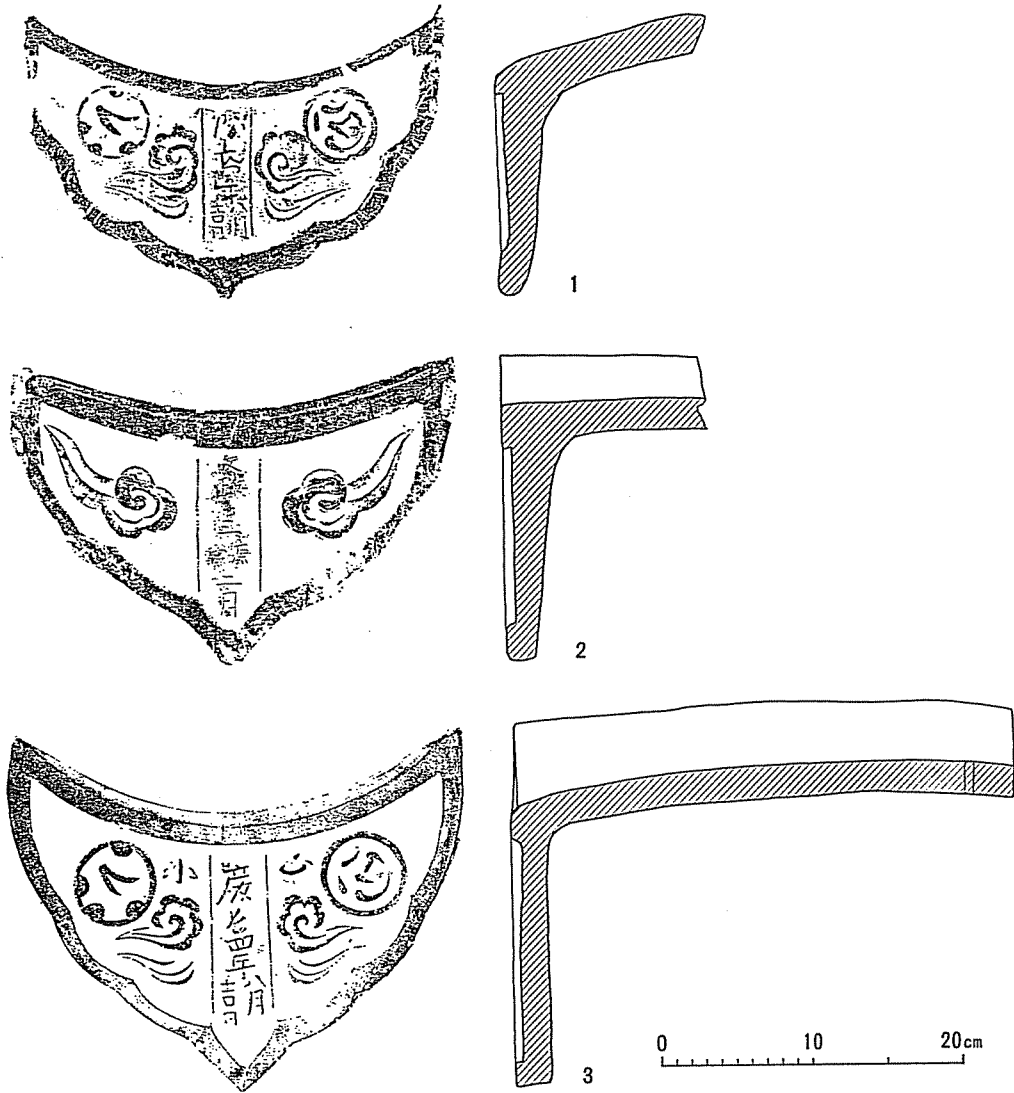
日本国内における高麗瓦の出土遺跡は、第1図に示す18の城または城跡である。

このうち特に興味深いのは、対馬の金石城の例(第2図)である。これは胎土からみても直接李氏朝鮮国よりもたらされたものであらうと報告されている(正林護『金石城』、『厳原町文化財調査報告書』1985年)。そしてこの断面を上記の製作技法にあてはめて測定してみると113度であり、120度との差は大きくない。

またこの角度の問題

でさらに興味深いのは熊本城の例である。ここの瓦は加藤清正によって連れてこられ、熊本市南郊の土山地区に居住した瓦工によって焼かれたものである。そして年号の明らかなものでみると、初期の慶長4年(1599年)例(第3図1)には107度の傾斜がみられるが、次の文政13年(1830年)例(同2)では直角になっている。この間に形態は高麗瓦のままでも製作技法上は日本化して旧スタイルにもどっているとみることができる。その変化のプロセスは目下詳細に検討中であり、改めて別稿で記すこととする。そして昭和34年(1959年)に、慶長4年(1599年)例をモデルにして天守閣用に作られた瓦も、その断面は傾斜していないのである(同3)。

これらの城関係の高麗瓦はいずれも男瓦・女瓦の区別のある本瓦であるが、江戸時代前期にこれらの一体化した棧瓦が発明されると、この前面にも高麗瓦の影響がみられるようになる。そのプロセスはまだ未解明であるが、昭和34年(1959年)の伊勢湾台風以後に東海地方では、この高麗瓦の影響のある棧瓦(波瓦・花瓦)が急速に普及していることは、きわめて興味深いことであ

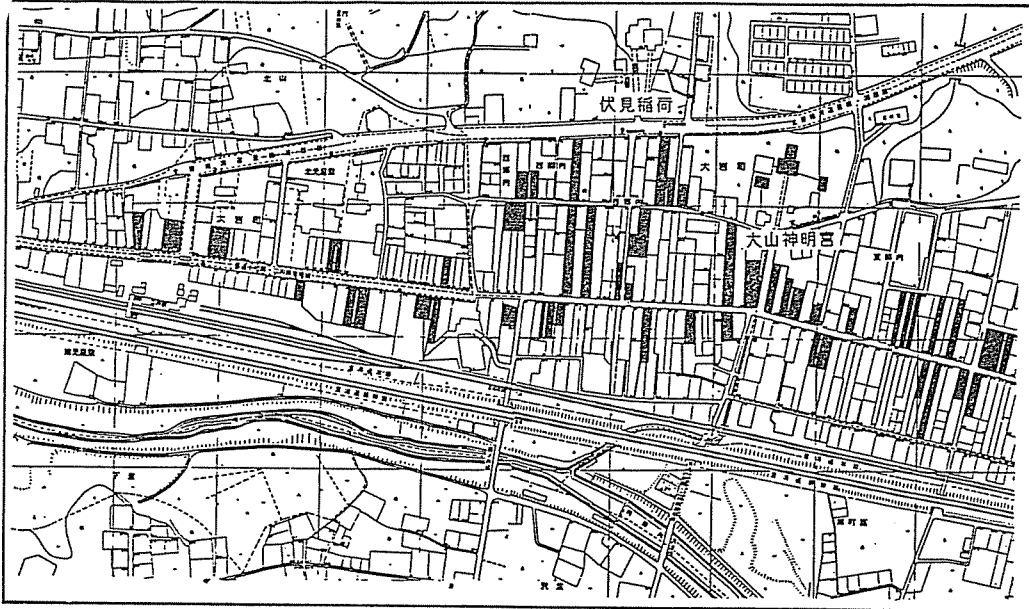


第3図 熊本城の高麗瓦

る。

その様子を旧東海道の宿場町であった二川宿（豊橋市）と有松宿（名古屋市緑区）とにおいて調査したことがあるが、それらは寺院や蔵などの古い建物には少なく、逆に新築の家ではほとんどが波瓦であった（第4図）。

伊勢湾台風直後に普及した背景には、きわめて実用的な理由があった。中心部の幅が広がった分だけ雨水の落下がよくなり、強風による雨水の裏側へのめくりこみが少なくなるのである。また幅広くなった瓦当面における文様の凹凸も、雨水の落下を遅らす効果をもっている。



第4図 二川宿における波瓦(■印)の分布

しかし最近ではこの実用性がうすれ、もっぱら新デザインの瓦として用いられている。これは偶然にも高麗瓦の本来の姿を再現することになった。高麗瓦は雨量の少ない中国北部において宮殿建築などの装飾として出現したものであり、モンスーン地帯の日本列島に南下して実用性が一段と高く評価されるようになったのである。

金星瓦の任五嶺社長も高麗瓦の重要な役割は、形態の装飾性、華麗な垂木の保護、および雨を落ちやすくすることである、と話してくれた。

今日これらの瓦を作っているメーカーからも使っているから人も、そのルーツが韓国にあることはほとんど忘れ去られているが、こうした身近な韓国文化の影響を積極的に再発掘していきたいと考えている。

4. 今後の課題

高麗瓦の影響は、本州と琉球とでは顕著な違いがある。第1図に示した分布図中浦添城・首里城では、高麗瓦の特徴である綾杉状の叩き目をもつ平瓦が出土しているだけであり、本稿でとりあげている瓦当面が倒三角形になった高麗瓦出現以前のものである。高麗瓦という名称は本来この綾杉状の叩き目をもつ瓦などにつけられたものであるから、早急に用語の整理が必要である。

そして本稿でとりあげている高麗瓦が琉球王朝に伝わるのは高麗王朝からではなく、中国の明朝からなのである。17世紀初頭に一つの定点をもつ那覇市の湧田古窯址(写真25)はこのことを

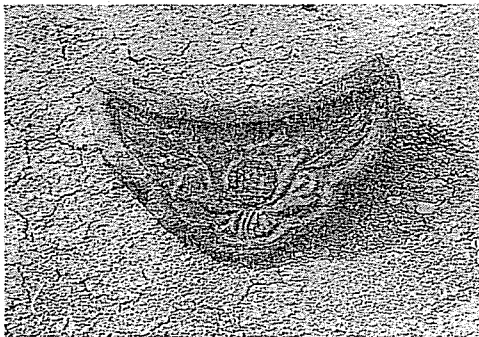
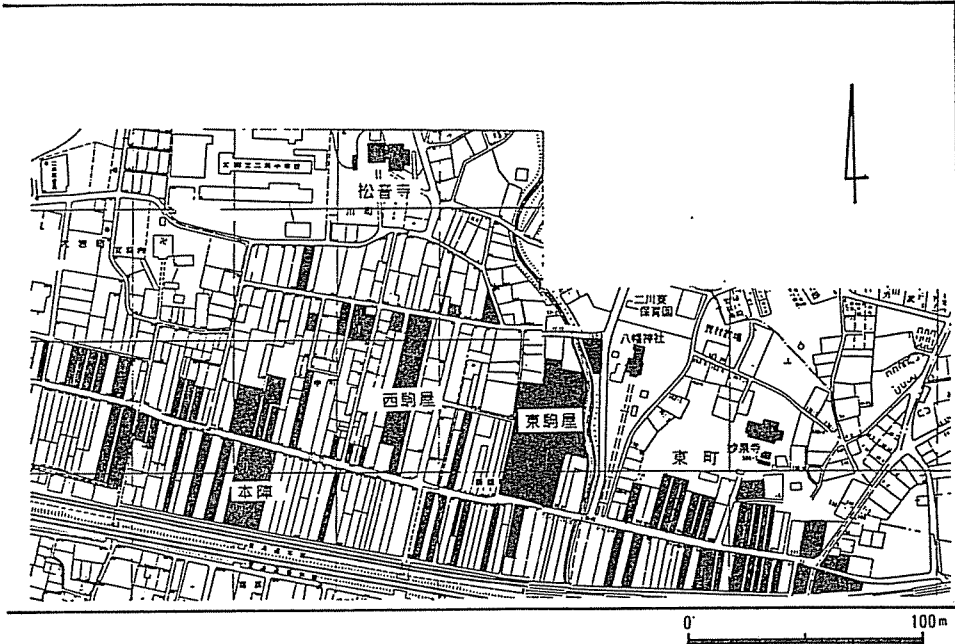


写真25 湧田古窯址の高麗瓦

実によく示しているが、昨年調査されたばかりでその全貌はまだ報告されていない。これらの資料の公表をまっけて、国際的な比較研究も今後の重要な課題である。

この国際的な研究の前提として、国内資料の集成作業も必要とされる。そして韓国などにおける高麗瓦の上限を、出土資料に基づいてもっと明確にしていきたいものである。

謝辞

本稿をまとめるに当っては、多くの方々の御指導と御協力を仰いだ。末尾ながら御名前を銘記して、深謝の意を表する次第である。

韓国 任五崙(金星瓦)・白光植(名古屋大)・李貞淑(世紀航空)・李中杓(大韓通運旅行社)

日本 正林護(長崎県教育庁)・東光彦(熊本市博)・島津義昭(熊本県教育庁)・勢田広行(熊本城修理事務所)・安里嗣淳(沖縄県教育庁)・盛本勲(同)・久保和士(名古屋大)・田中禎子(同)・吉本洋子(同)